

若年性がんサバイバーの心理過程におけるブログの意味

- 2 事例の半構造化面接からの考察 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
後藤 佳子

本研究では、近年インターネットの普及からブログに闘病記を綴っているがんサバイバーも少なくないことに着目し、若年性がんサバイバーの心理過程に対して、ブログが及ぼす影響を検討することを目的とした。

がん告知後、ブログに日常を綴っている比較的若年齢（35歳未満）のがんサバイバー2名に対して、個別に半構造化面接を行った。面接記録の逐語録から抽出された語りを「対自的」、「対他的：インターネットの世界」、「対他的：現実の世界」に整理し分析を行った。

抽出したカテゴリーを検討した結果、サバイバーはブログに思いや体験を綴ることで自己と深く向き合い、ブログを通して他者との関係を築く中で、がんの罹患によって喪失した生きる意味を再構築していく。また、ブログ内での同病者とのつながりは現実の世界でのつきあいに発展していた。サバイバーは現実世界において同年代の同病者とさらに親密な心理的なつながりを持つことで快復を進めたことが考えられ、それに伴って次第にブログへの依存から離脱して行った。サバイバーはブログへの依存から離脱した後も、他の同病者への支援としてブログを存続させていた。

若年性がんサバイバーにとって、現実の人間関係の構築が最終的には重要であり、ブログは、傷ついた自己の内面が次第に快復し、現実の世界に適応する過程の媒介として働いていると考えられた。それはあたかも Winnicott の提唱する「移行対象」のように機能していることが示唆された。